

# 底デカラ

産業資源循環の

—vol4—

株式会社ダイセキ

世の中はどんどん変わっていく。

その変化やニーズに合わせてながら

地道にひとつずつ課題をクリアしていく。

名古屋事業所  
業務部 業務課  
小川 明史さん

## 環境問題に着目し、 試行錯誤しながら廃油をリサイクル

創業者がバネ工場として起業後、成功と挫折を何度も繰り返し、時代を先読みしながら社会に役立つことを事業として展開してきた「株式会社ダイセキ」。公害など社会問題にも取り組みながら、産業廃棄物の処理とリサイクル事業に取り組むリーディングカンパニー取材しました。

# 資源として捉えている。 廃油を処分すべきゴミではなく、 ”知恵と工夫と行動力“

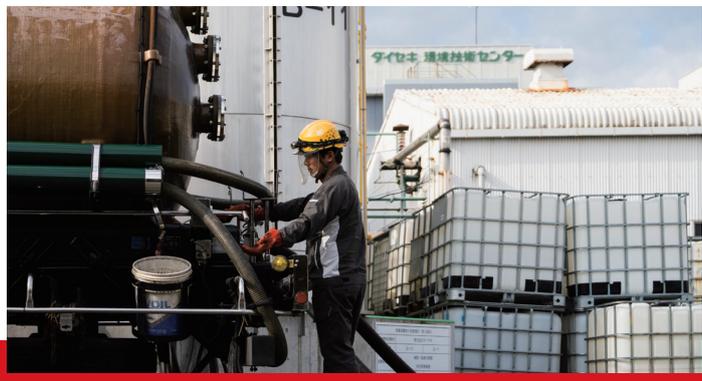


経済成長の両立を重視する方向へと転換していきました。その中で産業資源循環の考えが生まれ、廃棄物は川や海に流すのではなく、自ら適切に処理しましょう、処理ができないのであれば、お金を払って費用を負担した上で、専門の知識と許可を持つ処理業者に委託するという仕組みが整えられ、産業廃棄物処理業がスタートしました。

まだリサイクルという言葉が一般に浸透していなかった1958年、ダイセキの原形となる「株式会社大同石油化学工業」を設立。当時、油は海外から輸入される高価な資源であったことから、潤滑油の製造および廃油の再生事業に着手しました。高度経済成長が進む中、工場から立ち上る七色の煙や汚れた海は経済成長の象徴とされていました。しかしその一方で、公害問題が深刻化し、多くの人々が苦しむこととなりました。こうした公害問題を背景に、世の中が経済成長を最優先する考え方から、環境保全と

そうした社会的な背景のもと、ダイセキは「廃油を原料として活用できないか」「どうすれば再び原料に戻せるのか」と考え、廃油に着目しました。さまざまな試行錯誤を重ねる中で、廃油のリサイクルを可能とし、「あれも使えないか」とさらに検討を重ねることでリサイクルできる品目を増やすことに成功します。

今の時代からは想像しにくいことですが、不自由のない生活と豊かな環境を両立させることは決して当たり前のことではありません。製造業を中心とする排出事業者をはじめ、廃棄物処理業者や廃ガス処理のプラントメーカーなどが、数多くの失敗を重ねながら工夫を積み重ね、解決策を探し続けてきた結果が、今の私たちの暮らしにつながっています。産業廃棄物処理業界もまた、いわゆる「静脈産業」として長年にわたり産業界を支えてきたわけです。



**底デカラ** 産業資源循環の  
 掲載希望大募集中!!  
 「我が社こそは!」という  
 熱い想い、お待ちしております!

詳しくはP70まで

愛知県における経済活動のアンカーマンとしての役割を担う産業廃棄物処理業の社会的地位向上を目指し、その必要性をより広くの方に知っていただければと思います。

愛知産業資源循環協会の会員企業を訪問し、それぞれの企業が持つこだわりや強みを取材・紹介する企画です。企業の独創的でユニークな発想や考え方、業界を盛り上げようとする姿勢に迫りながら、愛知県における経済活動のアンカーマンとしての役割を担う産業廃棄物処理業の社会的地位向上を目指し、その必要性をより広くの方に知っていただければ

産業資源循環の  
**底デカラ**  
 とは?  


さまざまな用途や条件で  
使用された廃油を分析・選別し、  
資源として再び活用できる製品として再販売

先見性をもって、油を扱ってきた技術を廃油リサイクルへと転換する舵を切ったダイセキ。「安価な油を求めているマーケットに応えたい」という思いのもと、水分や粘度、夾雑物(きょうざつぶつ)がそれぞれ異なる多種多様な廃油を、求められる品質の油へとどのように高めていくのかに、ひとつひとつ向き合ってきました。手間を惜しまず工程を重ね、地道に課題をクリアしていきました。社長の山本哲也さんは、「元の原料はどのような油なのか、どんな工程で使われていたのか、何が混ざり、なぜ使えなくなるのか。そうした点をすべて分析した上で、元の油に戻す方法、油ベースの燃料に加工する方法、溶剤ベースの燃料に加工する方法な



受け取ったリサイクル  
処理前の廃油サンプル



灰の取り扱い、および  
運搬・埋立作業時には、  
粉塵の飛散を防止  
するため常時散水を  
実施



リサイクル処理段階にある  
廃油は、取り違え防止と工  
程管理の効率化のため、各  
貯蔵タンクに識別番号(タ  
ンク No.)を付与して管理

ど、できるだけ用途の近い形に向かっていけるよう各種分析を行い、その結果を踏まえて製品化してきました。自動車、機械部品、電機、電子、化学、食品など、さまざまな業種の企業と全国各地でお取引させていただき中で、多くのノウハウを蓄積することができました。廃油は処分するべきごみではなく、原材料として捉えています。」と話されました。

また、処理後には焼却を委託する残渣や、水処理を行なった上で下水へ放流するものもありますが、ダイセキは処理業者であると同時に、リサイクル油を販売するメーカーでもあることから、製品の品質保証には特にこだわっています。そのため、廃油の受け入れ段階から管理を徹底し、品質確保を意識した業務を進めています。

事前にサンプルを受け取り、成分分析を実施したうえで受け入れの可否や処理方法を検討します。廃油を積載したタンクローリーが工場に到着すると、技術スタッフが車両に上り、あらためてサンプルを採取し、事前サンプルと相違がないかを確認します。基本的には、搬入時点で処理方法は決まっていますが、想定していた性状と異なる場合には、柔軟に処理方法を変更します。廃油を受け入れること、処理後にリサイクル油として販売するということは、両側に顧客がいます。それぞれの要望に応え続けてきたことがダイセキの大きな強みとなっています。また、不要とされていた廃棄物に新たな価値を与えるダイセキの取り組みは、まさに「産業資源循環」を体現していると言っても過言ではありません。



## 世の中から必要とされることに常に挑戦していくことがダイセキのDNA

1995年、信用の獲得や社会貢献、そして業界イメージの向上のため産業廃棄物処理業界としては初となる株式を公開。当時、産業廃棄物処理業では上場企業はなく、上場自体が難しいのではないかと言われる中、環境面はもちろん社会にも貢献し、健全な業績を上げているのであれば必ず上場できるはずだと強い信念がありました。さらに、ダイセキが上場を果たせば、同業種に続く企業が出てくるだろうとの思いから、さまざまな苦労を重ねながら挑戦し続け、1999年、産業廃棄物処理業の専業として初の上場（東京証券取引所・名古屋証券取引所 市場第二部）を果たしました。この挑戦をきっかけに、現在では同業種からも複数の上場企業も生まれており、ダイセキの取り組みは業界全体の発展にもつながっています。

過去の歴史を振り返ると世の中は常に変化を続けており、今の「当たり前」が将来も当たり前であり続けるとは限りません。社会問題の解決に取り組み、世の中に必要とされ、役に立つ存在でなければ、企業は生き残ることができません。だからこそダイセキは、変化を恐れず、常に挑戦していくことが必要だと考えています。

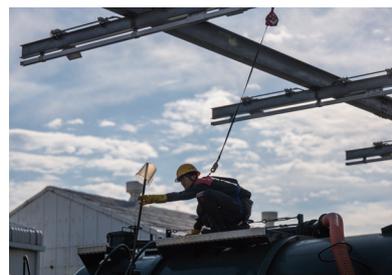
1997年、日本海で発生したロシア船タンカー「ナホトカ号」による重油流出事故の回収に携わり、1998年には、その功



## 安全衛生情報 ABOUT ヒヤリハット

### 専任体制で安全管理を徹底し、事故防止と意識向上に取り組んでいます。

各事業所に安全推進室というセクションを設置し、兼任ではなく専任の安全責任者を置き、細かい事故もすべて各事業所で共有して、対策を取っていることを進めています。また、外部の力も借りながら研修等でヒヤリハットに気付く力を育てています。「危険物、毒物、劇薬があり扱っているものが危なく、工場内には重機も車両も走っている中、危ないものを安全に扱うチャレンジを続けてこそダイセキ」と考え、健康や安全、コンプライアンスにはお金を惜しまない方針でさまざまな対策を講じています。



高所作業時は転落防止用のワイヤーハーネスを着用。2人ペアで仕事を行うなどさまざまな安全対策を講じている



事業所内のすべての階段に手すりが設置されている

績が評価され、海上保安庁賞および海上災害防止センター長賞を受賞。さらに、2011年の東日本大震災では、流出した油への引火による二次被害を防ぐため、自衛隊や消防と連携し、油の回収作業を行いました。また、「ある企業で誤って薬剤をタンクに投入してしまい、化学反応により亜硝酸という有毒なガスが発生し、近隣住民が避難する事態が起きました。状況を聞き、営業と技術者が現場へ向かい、当社で使用している薬剤をタンクローリーに積んで現地で中和処理

を行い、その後、発生した液体を回収・清掃する対応をしました。この事例は、警察や消防でも対応が難しく、化学的な知見とノウハウ、薬剤や移動のタンクローリーも持っていて、さらに廃液処理まで一貫して行える私たちだからこそ対応できたのだと改めて感じました。“油のプロとして、ダイセキにしかできないことがあれば、やらなければいけない”という思いを社員とともに大切にしています。」と山本社長は力強くお答えいただきました。

## 1に「健康」、2に「安全」、3に「コンプライアンス」、4にようやく「今期の業績」。そして5に将来に向けた挑戦「VISION2030」

設立以来“発想・構想・構造・実行”を企業理念に掲げ、日本国内において工場廃液のリサイクル事業をコア事業として展開してきました。その後、環境関連分野へと事業領域を広げ、現在は全国7か所の事業所と8つの関連会社によるネットワークを構築し、国内有数の資源リサイクル企業グループに成長しました。種をまけば必ず芽が出て育ち実を結ぶわけではない。だからこそ、常に新しい種をまき続けていくという考えのもと、各拠点では顧客から受け取ったサンプルをひとつずつ技術スタッフが分析し、その中に必ず次につながるヒントがあるはずだと、新たな発見や課題解決の可能性を探り続けています。

また、業界共通の課題である人手不足にも真正面から取り組んでおり、全社員に株式100株を配布し社員にも株主として会社づくりに参画してもらっています。VISION2030や挑戦を共有し、一緒に会社を良くしていく側、企業を成長させる側に加わってもらうというエピソードからも、ダイセキがどのような企業であるかが十分に伝わってきます。



経営においては、1に「健康」、2に「安全」、3に「コンプライアンス」、4にようやく「今期の業績」。そして5に「VISION2030」という将来に向けた挑戦と、明確な優先順位を掲げています。社会情勢に左右されることなく数々の困難を乗り越えてきたリーディングカンパニーらしく、挑戦を続けながらも、真面目で地に足の着いた会社運営を行なっている点が強く印象に残りました。100年後、世の中が大きく変化していたとしても、常に時代の一步先を走り続けている姿が、容易に想像できます。

## Message

### これから先も100年続く企業を社員と社員の家族と一緒に作りたい

ダイセキは旧社名を「大同石油化学工業」といい、油脂製品製造からスタートしました。その後、安価な原料を確保するために廃油に着目し、廃油のリサイクルに取り組み、廃棄物リサイクルの品目拡大と全国展開を進めてきました。お客様である製造業の皆さまからのご支援もあり、1995年には廃棄物処理業界初の株式公開も行うことができました。公害問題の解決、廃棄物の有効利用・リサイクルから、脱炭素の推進、サーキュラーエコノミーまで廃棄物処理業界に求められるテーマは変わってきましたが、これからもダイセキグループ社員と家族の健康、安全、そしてコンプライアンスを基盤に、「知恵と工夫と行動力」で次の課題に挑戦してまいります。

代表取締役社長 山本 哲也さん



7つの事業所で  
「一日一改善」を実施、  
立ち止まって安全確認を  
習慣化する”輪留めの心“を推進



工場内の各所に安全を促す音声ガイドとセーフティマップが設置されている

### 株式会社ダイセキ

【本社・名古屋営業所】  
名古屋港区船見町1番地86  
TEL 052-611-6322 (代表) / FAX 052-612-4382



WEBSITE